

主に希望をかける人は幸せ

詩編 146 : 5－10



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第 16 主日

2025 年 9 月 28 日

京都聖三一教会にて

今日は、先ほど一緒に唱えた詩編第 146 編を心にとめたいと思います。146 編から詩編最後の 150 編までの五つの詩編は「ハレルヤ詩編」と呼ばれています。というのは、この五つの詩編がいずれも「ハレルヤ」から始まって「ハレルヤ」で閉じられるからです。残念なことに、今日唱えたのは5節からでしたので、冒頭のハレルヤを確認することができませんでした。後からでも、祈祷書や聖書を開いてみてください。感謝も、嘆きも、神への信頼も、すべて「ハレルヤ」（神を賛美せよ）で包まれています。

（以下は祈祷書に基づきます）

5 ヤコブの神を助けとし Ⅱ 主に希望をかける人は幸せ

日本語訳では「幸せだ」が文の最後に来ていますが、原文は「幸せだ！」（アシュレー＝ヘブライ語）から始まります。幸せだ、主なる神に希望をかける人は。詩人が、昔の人々がその幸せを味わった。それを歌いつつ、わたしたちにもその幸せを受けるように呼びかけています。

主に希望をかける人は幸せ

ここで「希望をかける」というのは、根拠もなしにとにかくそうする、というわけではありません。わたしたちを確かに救われる神が存在する。この方はわたしたちのために働いてくださったし、これからも働いてくださる。希望の神（ローマ 15:13）がわたしたちに希望を抱かせてくださるのです。

6 神は天と地を造り、海とその中のあらゆるものを形造り ||
とこしえにまことを示された

神の創造のわざが歌われます。神は「とこしえにまことを示された」。まこと、「真実」です。神は真実の神。気まぐれであつたり無責任であつたりはされない。たとえそれが見えないように思えることがあつたとしても、神はわたしたちのことを思い続け、支え続けてくださる。その真実をこの詩人は、またその周りの人たちは経験したのですね。

次の7節から、その希望の神、真実の神がどういう方であるかが歌われます。

7 虐げられた人のために審きを行い || 飢え渴く人にパンを恵み、捕らわれた人を解放される

8 主は見えない人の目を開き || 卑しめられている人を高め、正しい人を愛される

9 主は他国から来ている人を守り || 身寄りのない子供とやもめを支え、悪人の企てを碎かれる

10 主はとこしえに治められる || シオンの神は世々に、ハレルヤ

虐げられた人、飢え渴く人、捕らわれた人、目の見えない人、卑しめられている人、他国から来ている人、身寄りのない子供

とやもめ。神はこの人々の味方であり、この人々を愛し、解放し、支えてくださる方だ、と歌います。これが真実の神、希望の神です。これはわたしたちの主イエスにしっかりつながります。

ところでここに挙げられた人々の中から、今は特に9節の「**他国から来ている人**」に注目しましょう。

「**主は他国から来ている人を守られる。**」

この「**他国から来ている人**」は、新共同訳聖書などでは「**寄留の民**」と訳されています。単なる旅行者ではなく、短期的にか長期的にか、あるいは代々にわたってか、いずれも含めて、外国あるいは他の地域から何らかの事情でここに来て、暮らしている人々です。今の言葉で言えば、難民、また在日滞日外国人もそれに当たります。

この「**他国から来ている人**」「**寄留の民**」を神が大切にし、守られる。それだから神を信じる者も、その人々を大切にしなければならぬ。これが聖書に一貫する精神です。

聖書の中から「**寄留の民**」の例を思い出してみましょう。まずわたしたちの信仰の祖先と言われる**アブラハム**がそうです。アブラハムとその一家一族は、チグリス・ユーフラテス川のほとりから遠い旅をして、今のパレスチナにやってきました。何度も天幕を移しました。まさに寄留の民です。

アブラハムがヘブロンという所に、ヘト人に囲まれて住んでいたとき、妻のサラが息を引き取りました。そのとき、彼はサラのために墓を用意しようとして、ヘトの人と丁寧な交渉を行い、しかるべき代価を払ってその土地を買いました。ヘトの人々の前で彼は自分のことを「一時滞在する寄留者」と言いました。隣り合って住む人々との間に、平和な関係を築くために心を砕いたのです（創世記 23 章）。

今そのアブラハムの子孫を自称するイスラエル国家がパレスチナ人を、言葉も失うほどに虐待し命を奪っている。アブラハムはそれを自分の子孫と認めるでしょうか。アブラハムの信仰と精神を継承する者こそ、アブラハムの子孫なのです。

次に思い浮かぶのは**モーセ**です。彼は奇しき経緯から、エジプトの王子として育てられたのですが、やがてエジプトを脱出し、遠くミデアンの地に逃れて、そこで 40 年の間羊飼いとなって暮らしました。彼はその地の女性ツィボラと結婚して、男の子を与えられました。その時、彼は「わたしは異国にいる寄留者（ゲール）だ」と言って、その子を「ゲルショム」と名付けました。「ゲルショム」とは、「そこ（異国）に寄留する者」という意味だそうです（出エジプト記 2:22）。

自分たちは寄留者の苦しみを味わったのだから、寄留者の苦しみを思って大切にしなければならない。これが、神の民イスラエルの大切な教えなのです（出エジプト記 23:9）。

思えばイエスご自身も寄留者でした。幼いときには命の危険にさらされて、両親によってエジプトに逃れました。そしてあるとき、自分のことをこう言われました。

「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」ルカによる福音書 9:58

寄留の人はたいてい生活に困難がある。精神的にも厳しくつらいものがあって、それはなかなか理解されない。わたしの友人に在日韓国人の牧師で金さんという方がいます。彼は生涯をかけて「精神に課題のある人」——と彼はそういう表現をするのですが——が安心して過ごせるための場所、施設、たまり場を造り、それを運営してきました。「精神に課題のある人」とは、うつや統合失調症などをふくめて、社会生活が困難な人、場合によっては自ら命を絶つかもしれない人を含みます。

彼は昔こういうことを話してくれました。自分が本名を名乗るか、通名（日本名）を使って生きるかだけでもものすごい葛藤がある。そのために気持ちが追い詰められたようになって、ある時は高い建物の屋上から飛び降りようかと本気で思った、と。日本の社会がそれほど彼を生きづらくしてきたのを、わたしたちはほとんど知らないでいます。

今日の詩編 146 編に戻りましょう。「ハレルヤ」から始まりました。

5 ヤコブの神を助けとし || 主に希望をかける人は幸せ

9 主は他国から来ている人を守り || 身寄りのない子供とやもめを支え、悪人の企てを碎かれる

神さまは弱った者の味方です。弱らされた人を守り支えてくださる方です。希望を失いそうな者に希望を与えてくださいます。希望の神、真実の神です。

わたしたちが弱ったとき、また何かの力によって圧迫され苦しめられるとき、困難を負うとき、神さまに希望を持つことができます。

「主に希望をかける人は幸せ」

今日の詩編は、わたしたちを招いています。虐げられた人びとのことを知り、その傍らに、近くに立つようにと。同時に、この詩編はわたしたちに教えてくれます。わたしたちが弱らされ、困難を抱えるとき、神が味方してくださることを。

「主に希望をかける人は幸せ」

主なる神が、この幸せをわたしたちにも味わわせてくださいますように。アーメン